
魔術と科学の交差点

蒼輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術と科学の交差点

【Nコード】

N6667Q

【作者名】

蒼輔

【あらすじ】

俺は戦う・・・その為の力がこの俺にあるのだから！！

超能力者であることが当たり前になった現代・・・超能力者はその名を変え、『魔術記憶者』メモリーズとし、リンクを付けられる様になった。四季ノ宮学園に通う二年生、『夏目』なつめ 竜馬』りゅうま はリンク0、つまりは無覚醒者だったが・・・彼の覚醒と共に平和な日常が変わる・・・

一人の少年が仲間と共に過ごした日々のお話。

プロローグ（前書き）

さてさて、やっとこさ進路が安定した蒼輔です。長い間もう一つの小説が更新できてませんが、続けていくつもりです。

さてさて、この小説ですが、自分の進路が決定した事を記念として書き出した小説です。また懲りずに学園戦闘物ですが、どうか読んでやってください。

プロローグ

メモリーズ
魔術記憶者・・・それはこの世の神秘、魔法陣を自らの遺伝子に持つ異能力者・・・その存在は現在に至るまでこう呼ばれていた・・・超能力者と・・・。彼等は時には炎を操り、時には身体を変化し、時には・・・竜になった。その力は恐れられ、黙秘されてきたが、現代の科学により、その力は誰もが持つことが出来るとされた。そう、この世界では超能力者である事が当たり前となったのだ。だが、それは始まりにしか過ぎなかった・・・超能力者、否、メモリーズによって引き起こされる争いの・・・

これは平和の為に戦った彼らの日常と戦いのお話。

ブローグ（後書き）

誤字脱字があれば教えてください。すぐに修正します。

平和な日常

私立四季ノ宮学園しりつしき みやがくえん・・・愛知県の某所にあり、創立1110年を誇る歴史と共に、学業優秀で運動も盛んという、漫画とかに出てくる様な名のある有名校だ。更に、最近になつて『魔術記憶者』メモリーズの為の養成学科も始めてしまったので、更に世間からの注目を集めてる。ちなみに、某六大への進学率も高いし、就職率も高い。勿論、著名人も数多く輩出しているから、自然と優秀な生徒が集まってくるんだが・・・俺にとってはいい迷惑だ。そんな学校での唯一の落ちこぼれ(であろう)がいる。身長172cmでとりわけ大きい訳でもなく、勉強もこの連中に比べれば底辺、人付き合いが特別上手い訳でもない二年生、そいつの名前は『夏目 竜馬』なつめ りょうま、一応はメモリーズだ・・・まあ、俺なんだけどね。学校に二人しかいないランク0のメモリーズの一人・・・つまりは何一つとして能力は無し、学校唯一の落ちこぼれである俺がこの学校で唯一他人に誇れるものなんて何も無いに等しいつてのが現状だ。奇人変人・・・天才つて言うのか？そんなんがいつぱいいるこの学校じゃあ誇つても意味を成さないつてのが正しいのかな？・・・ま、そんなこんなで入学してから一年、有名大学への進学をさっさと諦めて毎日をダラダラと過ごしてたある日の事だった・・・

中間テストを終えたその日の昼休み、他の生徒は友達とテストの答え合わせ(さも点数がいいんだろうな)なんかしながら食堂の方へ歩いていく。俺はといえば、テストは散々、財布には絶対零度並の寒冷期が到来していた。簡単に言えば、金が無い。ちなみに、両親が科学者であるので家を空けている事が多いので、実質な所、俺は科学者の姉と高校一年の妹との三人暮らしをしている。生活費は毎月決まった日に両親から口座に振り込まれるし、姉貴も手近なメモ

リーズの研究所で働いてるし、姉貴も妹も自炊できるから生活には困っていない。姉貴からこづかいは毎月しつかりと貰っているんだが・・・今月は少しゲームに回し過ぎたかな？食費（主に夜食など）の計算しておけばよかったな。ちなみに、家に戻っても、今日は姉も妹も出かけているから自宅にも昼飯は無い・・・完璧な八方塞がりとはこの事だ。そんな事を考えながら俺はがっくりと肩を落とし、空腹を我慢しながら食堂に行くのを諦めようとした時だった

「あれ・・・どうしたの、りょうちゃん？」

聞き覚えのある物静かでおっとりとした女子の声が背中の方から聞こえた。このエリート高校において落ちこぼれの俺と友好関係がある数少ない女子であり、生まれた病院から小中高、クラスもずっと一緒に、家も真正面、勉強もできて家事もできるが運動は少し苦手、身長やバストサイズは平均、幼少から茶道をたしなんでいて今では大人にも胸を張って教えられるレベル・・・正に大和撫子と言え、更には俺よりも五つも格上のランク5のメモリーズ・・・本当に完璧な俺の幼馴染である、『風原 千登瀬』だ。・・・彼女について長く語ったのは決して俺の僻みでも、作者がこんな幼馴染が欲しかったとか、そんなんじゃないぞ。さて、そろそろ話を戻そうか。

俺は千沙登の声がした方に振りかえると、今現在の俺のお財布事情と状況をかいつまんで説明した。・・・説明してる間、あまりにも惨めで涙が出そうになっていたのは秘密にしておこう。

「もー、ゲームは買いきすぎちゃダメだってあれ程行ったのに・・・」

俺の話を聞いた千登瀬は、呆れた反応はせず、自分の両手を腰に当てて俺にお説教を始めた。自業自得なので何も言い返せずに頷くしかない自分が更に惨めに思えたが、それ以上に廊下のご真ん中で女子にお説教される、このシュールな光景の方がよっぽど俺には堪えていたりする。

「ちゃんと聞いている、りょうちゃん？」

どうやら頷くだけでは聞いてない様に見える様だ。

「聞いてるよ」

俺は苦笑いしながら聞いてる事をアピールする。お互いに長い付き合いだ、この程度のやりとりは毎日のことだったりする。・・・ちよつとでもうらやましいと思っただ奴にはすぐに変わってやるぞ？俺のこの不幸な人生付きでな。

「むー・・・」

千登瀬は小さな頬を可愛らしく膨らませてそっぽを向き、自分が怒っている事をアピールする。千登瀬よ、残念ながらあんまり怖くないぞ。

「ちゃんとした理由があつたら私の家で食べさせてあげてもよかつただけだなー・・・」

千登瀬が俺に聞こえるか聞こえないかくらいの小声ですんごく魅力的な事を言った。それを聞いた俺の反応は・・・残念ながらこれ一択だろう。その場で千登瀬に向かって正座して・・・深々と頭を下げた。

「千登瀬様、この恵まれない子ヒツジめに、どうかお恵みをお願いします」

・・・決まった・・・我ながら完璧な土下座だ。すれ違っていく生徒たちがクスクスと笑って行くが、この際気にしないでおう。背に腹はかえられないからな。

「ちよ・・・ちよつと、りょうちゃん・・・流石にそこまでやらなくてもちやんと食べさせてあげるからあ」

千登瀬は顔を真っ赤にしながらかたふたと必死に俺の顔を上げさせようとする。土下座して千登瀬に昼飯を食わせてもらう・・・千登瀬ファン（主にこの学校の千登瀬一筋の男子生徒共）に見られたらミンチにされて東京湾辺りに沈められそうだな。

「んじゃあ、ごちになつていいのか？」

俺はようやく頭を上げると、笑いながら千登瀬に問いかける。ちなみに、長年の付き合いで俺はこの土下座パターンを何度も使用しているのだから慣れてるんだが、千登瀬は未だに慣れないらしい。

「だからあ、最初からそのつもりなんだってばあ」

まだ落ち着いていないのか、千登瀬の頬はほんのり赤みがかっている。とにかく、これで俺は昼飯にありつける事になった、千登瀬にはマジで感謝だな。

「ほら、行くよりようちゃん」

千登瀬はそう言うてから俺を立たせる為に手を差し伸べてくれる。

俺はその手をとって立ち上がろうとした時だった。

「捜したぞ・・・と、ん？そんな惨めな格好で何をやっているのだ、My同士夏目よ？羞恥プレイにでも目覚めたか？」

今のこの惨めな状況で来るんじゃないやねえよ、この野郎。とりあえず紹介しておこう、この含みのある男子の声の主の名前は『月詠^{つきよみ}』、この学校での俺の数少ない親友の一人であり、俺と同じランク0の無能力者。ちなみに、月詠の名前には名字が無いのは、月詠は赤ん坊の頃に教会の前に捨てられていたらしく、哀れに思ったシスターに拾われ、教会の孤児になった為らしい。しかも名前も素性も何一つ分からなかった為に、名前もそのシスターに付けて貰ったものだと俺は聞いている。・・・とにかく、苦勞人って事だ。

「んな訳ねえだろ、俺は変態かよ」

俺は月詠に反論しながら立ち上がる。

「ほーう、てつきり俺は千登瀬嬢に調教されて喜んでいるものだと思ったのだが・・・違ったか」

「^{ちが}違え！！」「違つよお！！」

それぞれの反応で反論する俺と千登瀬。俺は少し声を大きくしただけだが、千登瀬は顔が真っ赤になり、ゆでダコみたいになっている。そして、ニヤニヤとしながら俺と千登瀬を交互に見る月詠。この野郎、完全に楽しんでやがるな！？

「んで、結局何の用だ？」

俺は一気に話しを変える事にした・・・何せこのままほおっておくと千登瀬の顔が沸騰して倒れかねないしな。

「ああ、その事だが・・・」

月詠もこれ以上からかうのはやめた様で、まともな会話が始まりそうなの時だった。

「見つけたぞお!!夏目え!!そして月詠い!!」

おつそろしく野太い声が聞こえてきた・・・成程、月詠が俺を探していたのはそういうことか。その声がした方向に目をやると、筋骨隆々のたくましい男性が凄まじい勢いでこっちへ向かって来ている。

「月詠・・・一つ確認だ・・・」

「何だ？」

「お前は俺の味方か？」

「当たり前だ、俺もあの怪物に追われてるんだからな」

「ふえ?・・・りょうちゃん達、まさかまた・・・」

この際、千登瀬の疑いの目は無視する事にしよう。俺と月詠はそれぞれ味方だと分かった・・・さて、ここから俺達がとる行動は一つ・

・

「さらばだ!!」

「あつ、ちよつと・・・」

俺と月詠は千登瀬の静止を無視し、同時にスタートダッシュ、全力疾走で廊下を駆けだした。その理由は一つ・・・四季ノ宮の魔人こと『宇佐美 弘志』先生から逃げきるためだ。その理由としては、俺と月詠はランク0で能力が使えない。つまりはみんなと同じ実技の授業では落第が目に見えている。補習を受ければ済む話しなのだが、魔人とマンツーマンでみっちりしごかれる為、俺達は度々抜けたかと言つて抜け出てきて、千登瀬と会話している内にすっかり忘れていた。その時は月詠と一緒に行くと言つて逃げ出すからと言つて月詠は解放してもらつていなかったはずだが・・・シスターに色々叩きこまれたとか何とかで、俺達よりもある意味で賢かったりする。その為、逃げ出す事は造作も無いらしい。俺も何回もその悪知恵には助けられたりしている。・・・たまにその悪知恵でとんでもない事を仕出かすが、それはまた別の話だ。今は兎に角学校から脱出

するのが先決だろう、そう思っただけで全力で走っているのだが……

「何処へ行く気だお前達！補習はまだ途中だ、逃がさんぞ！！」

クソッ、もう後5メートル位まで差を詰めてきただと！？流石は魔人、あの筋肉は伊達じゃない！！俺達も必死で走るが、帰宅部の俺達と水球の日本の代表候補じゃあ体力が違いすぎる。ここは……

(My同士夏目よ、この状況で魔人から逃げきるならば……)

(ああ、あそこしかないな)

俺達はアイコンタクトで意思を疎通、そして廊下の曲がり角を右に曲がると……

「だあああつしやああ！！」「とおうつ！！」

開いていた窓から外へ飛び出した。

「バカな！？ここは三階だぞ！！死ぬ気か！？」

魔人が驚きの声を上げた。それに、言っている事ももつともだが……残念ながら俺達は逃走に使えるそうなどなら全て熟知している。魔人が窓から俺達の落下地点を見て驚いていた。

「あいつら……これを知っていたのか……！！」

そう、この下には陸上部とかが使っているマットが積み上げられている事も計算の内だ。俺達の身体はマットに叩きつけられたが無傷。流石に身体に多少の衝撃はあったけどな。

「それじゃあ、さようなら、宇佐美先生！！」

「My同士夏目よ、千登瀬嬢には落ち合う場所は連絡しておいた、我々も向かうとしよう」

「OK、そうしよう」

俺達は下駄箱で上履きと靴を交換し、千登瀬との待ち合わせ場所である空地へと向かった。……その場所へ向かう事こそが、俺の人生を大きく変える事になるうとは知らずに……

平和な日常（後書き）

誤字脱字があれば教えてください、すぐに修正します。

俺が一度死んだ日（前書き）

新しく小説をアップしたと思ったら、しばらくコンピューターが入院するはめになりました（泣）

そのため、前回からかなり間があく事になってしまいました。

ですが、無事にコンピューターが返ってきたのでまた再開します。よろしければ読んでやってください。

俺が一度死んだ日

「まあ、二人とも、また宇佐美先生の補習をさぼってえ……後でどうなっても知らないよ?」

空き地に着いてからの千登瀬からの第一声は俺と月詠への注意だった。

心配してくれるのは嬉しいんだが……

「何とかなるだろ」

「うむ、また抜け出せばいい」

残念ながら俺達二人にまともに補習を受けるといふ考えは存在しない。

それに、俺達二人はランク0。能力が使えないから補習を受けても効果が無いってのが現状だ。

そんな訳で、俺達二人は単位がヤバくならないと補習を受けないってな訳である。

……一般学科は決して悪い訳じゃないんだがなあ。

そんな事を考えていると、どこからともなくぐぐうぐうとという音が聞こえてきた。

「そんな話しよりも、俺はかなり腹が減ったんだが……」

ここで俺の腹が自己主張を始めた。

気付けば時間は午後1時半、しかも魔神に追いかけてかなりのエネルギーを使ってしまった。俺はとっくに空腹の限界に達しているのだった。

「ふむ、俺も流石に空腹だな」

俺の意見に月詠も同意見のようだ。そりゃそうだ、俺達二人はさつきまで全力疾走していたんだから。

「そっか、お昼まだだったねえ」

千登瀬もすっかり忘れていたとばかりにお腹に両手をやっていた。うん、千登瀬は本当に忘れていた様だね、何故ここに来る事になったのかの経緯までも。

「遅くなっただけど、私の家に行こうか」

そう言っつて、千登瀬が歩き出して俺達も続こうとした時だった。

「おやおやあ？最弱のランク0コンビがいますぜえ、村瀬先輩」

「本当だな、村上君」

声をかけてきやがったのは……うっわ、出やがった、学園の珍名物の村々（むらむら）コンビ。

無駄に長いリーゼントで一年生の村上、無駄に多いアフロで二年生の村瀬を合わせてそう呼ばれている。

二人とも典型的な不良生徒で、柄が悪く、二人揃うと誰かれ構わず絡んでくるから達が悪く、特に俺と月詠に頻繁に絡んでくる傾向にある。

しかも二人仲良くランク3……ここまでくると気持ち悪いレベルだと思う。

まあ、この変態共の説明はこれぐらいでいいか。

どうやらこいつらの帰宅時間と俺達の行動が、残念ながら重なってしまったらしい。

これから昼飯って時に……本っ当に空気の読めない奴らだな。

「ああらあゝ、風原ちゃん、そんな雑魚共と関わってちゃん良い事無いよあゝ」

「そうそう、そんな雑魚共ほかといて、俺達と遊ぼうぜ」

三流の悪役並の誘いをかける村々コンビ・・・本当にバカなんだな、こいつら。

「ほらほらあゝ、行こうぜ」

俺達三人が呆れて相手をしないようにしているのをどう勘違いしたのかは知らないが、調子に乗る切っ掛けになったらしい。

村上が千登瀬の腕を取って連れて行こうとした。だが・・・

「触らないで!!」

思いつきり拒絶されていた。うん、いい気味だな。

「てめえ、下手に出てりゃあ調子に乗りやがってえ!!」

今の行動だけで村々コンビを怒らせるには十分だったらしい。

お決まりのセリフを吐き捨てる村々コンビ。

・・・そろそろ危ないな、そう月詠にアイコンタクトる。

すると、月詠も同じ事を思っていたらしく、俺にいつでも戦闘可能だとアイコンタクトを返して来た。

てなわけで、一暴れするつもりでしょうかね。

「いいからこっち来やがれ!!」

実力行使で千登瀬を連れて行こうと村瀬が右腕を伸ばした。

その腕が千登瀬に届く寸前に俺がその腕に向かって力いっぱい

右回し蹴りをお見舞いし、払い飛ばす。

それと同時に、月詠が村瀬の少し後ろにいた村上の顔面に向かって右ストレートをお見舞いし、吹っ飛ばした。

うん、我ながらナイスな連携だと思う。

「てめえら、何しやがるう!!」

「そうだ、そうだあ!!」

いきなりの反撃に驚いたのか、蹴られた腕を押さえ、声を裏返し
ながら村瀬が抗議の声を上げた。

続けて殴られた左の頬を押さえながら立ち上がった村上も抗議に
続く。

・・・同じく声は裏返ってたりする。

「ほおう・・・何をすってっていうのは俺達の方だと思っただがな」

月詠が冷笑と共に正論を述べる。この手の輩を怒らせるには一番
効果的な挑発だろう。

「んだとこらあ!!」

「ランク0の分際で、俺達に逆らおうってのか!？」

案の定、挑発に乗ってきた村々コンビ・・・どんだけ典型的なん
だ、こいつらは・・・。

「それで、逆らったらどうなるのだ？」

月詠が明らかに上からの態度で挑発を重ねる。すると・・・

「」「こくなるってんだよあ!!」「」

「て、てめえらぁ……」

村瀬がかすれかすれの声で俺達に何かを言おうとしていた。後生だ、捨て台詞くらいは聞いてやるか。

「覚えてやがれえー！ー！ー！ー！！！！」

村瀬はノビている村上を抱え、三流以下の捨て台詞を言いながら素晴らしい逃げ脚で逃げに行った。

……あいつらは何がしたかったんだろうか？

「千登瀬嬢、怪我は無いか？」

月詠が後ろにいる千登瀬に振り返り、怪我の有無を確認している。村々コンビが何かする前に追い払ったから大丈夫だとは思って……
・と思った矢先だった。

「……貴様……何者だ？」

いきなり月詠が声の質を変え、意味が分からない事を言い放っていた。

「おいおい月詠、それは芝居か何かの……！！」

だが、俺も後ろを振り返った瞬間、その言葉の意味はすぐに理解した。

金髪のオールバック、スーツを着たの見た事も無い男が千登瀬を肩に担いぎ、こっちを見てニヤニヤと笑っている。

千登瀬は気を失っているのか、ピクリとも動かない。

「てめえ！！千登瀬に何をしたあ！？」

俺はそう怒鳴ると同時に男に向かって拳を振り上げ、突撃していた。

だが・・・

「おいおい、そう怒りなさんな」

男は冷静に俺の拳を左手で払った。

俺は勢い余ってバランスを崩してその場に倒れてしまった。

「だから言ったじゃねえか・・・」

男は呆れたように自分の顔に手を当て、そのまま・・・

「俺様は手加減出来ねえってなあ！！」

男の顔が一気に凶暴な顔に変わり、バランスを崩して倒れていた俺の腹に思いつき蹴りを叩きこんだ。

しかも、男の蹴りは普通の蹴りとは違い、俺に直撃すると同時に一瞬動きが止まった。

蹴り飛ばされているはずなのに、俺の身体は何故か吹き飛ばずに動かないし動く事も出来ない。

だが、何事も変化が無い訳じゃなく、俺にかかる力が徐々に大きくなっていくのが分かった。

そして・・・

クラッシュ
「爆発！！」

その声と同時に、俺の腹部に凄まじい衝撃が走り、吹き跳んだ。

俺は声にならない悲鳴を上げ、無残にも塀に叩きつけられ、蹴られた衝撃と叩きつけられた衝撃によって俺は大量の血を吐き出した。こりゃあ背骨やら肋骨やらかなりの量の骨もやられてやがるな。。。

これから俺の意識は深淵へと沈んで行くのが直感で分かる・・・それだけ巨大なダメージを、ランク0の俺の身体は耐えられるわけがない。

薄れゆく意識の中、俺は男の高笑い、月詠の俺の名を呼ぶ声とともに・・・この場にいる誰でもない誰かが俺の名を呼んでいる様な気がした・・・

俺が一度死んだ日（後書き）

誤字、脱字があれば教えてください。すぐに直します
感想もいただけると、作者のやる気がアップします W W

目覚め

暗闇の中、身体中が痛む。

その痛みで意識がある事を認識する。

目を開けると一面に映ったのは・・・黒。

「・・・竜馬・・・」

真つ暗闇と俺しか存在しない世界・・・この暗闇しか無い世界で誰かが俺を呼んでいる・・・？

微かにしか聞こえないので場所が分からない。

「・・・夏目・・・竜馬・・・」

俺を呼ぶ声が少し強くなった・・・近いのか？

誰だ、どこにいる・・・？

周りを見渡しても闇しかない。

「・・・夏目 竜馬よ・・・！！」

今度ははっきり聞こえた。

それと同時に、温かい光の様なモノも感じた。

「俺を呼ぶ声、それにこの感じは・・・上か!？」

そう思うと同時に一気に上を見上げる。

そして、俺は目に映ったモノに見とれてしまった。

何故なら、俺の目に映ったモノは・・・心を奪われるほど神秘的に輝く、蒼い鱗を纏った『竜』だったのだから。

「・・・お前は・・・誰だ・・・？」

本能的にそう話しかけていた。

竜をお前と言つのは妙な感じだが、そう呼ぶのが良いと思ったからだ。

「我が名は『炎青』、『東青幻獣王炎青』なり。こうして対話出来る時を待ちわびたぞ、夏目 竜馬・・・否、新たな『青竜王』候補よ」

炎青と名乗る竜は貫録のある声で意味の分からない事を言い放った。

東青幻獣王？俺が新たな青竜王？どういふことかさっぱり分からん。

「ちょっと待て、言ってる意味がさっぱり分からねえぞ。それに、俺が新たな青竜王ってどういふことなんだ？」

とりあえず、目の前にいる竜に説明を求める事にした。

今の現状ではこれしかない。

「我は東の地を守護せし王だが、この世には存在せぬ・・・そして汝は我の分身となる資格を持ち、我の力を具現化させられる確率を持つ存在、即ち、青竜王候補であり、この世での我となりえる者だ・・・」

・・・さっぱり分からんぞ。

「・・・簡単に言つと、何なんだ？」

俺は一応簡単な風に言っただけでほしいと聞いてはいるが……今の炎青の言葉で大体の事は予想出来ていた。

何故なら、今の様な説明を授業で聞いた事があったからだ。

稀まれに現れる、神話に出てくる幻獣の力を扱う事が出来るメモリーズ……

「ふむ、この世では呼び方が違うのだったな……この世ではたしか……『ゴッドメモリーズ神力記憶者』と呼ばれていたはずだ」

ゴッドメモリーズ……世界では存在すらもハッキリしていない、伝説の中の存在とされている。

俺の記憶が正しければ、現在では11人が該当し、世界が躍起になつてそのゴッドメモリーズを自分の国のモノにしようとしているらしい。

理由は言わずもがな、戦争の為だろうけど。

彼等は共通して、共通の要因で神話上の獣と出会う事で身に付けたと言っている。

その共通の要因とは……死だ。

彼等は一度死んだと、揃えて口にしたらしい。

そして、俺の今の状況は……多分だが死んでる。

つまりは、他の11人の言っていた状況と一緒な訳だ。

だが……何故俺が？

何の取り柄も無いランク0、それが俺だ。

「不思議そうだな……無理は無いかな」

俺が考え込んでいると、それを見抜いたらしい炎青が声をかけてきた。

「何故自分なのか、その理由は何れ分^{いず}かる。それに・・・今の汝にとって大切なのは、何故自分なのかという理由ではあるまい？」

俺は炎青に言われて黙り込んでしまった。

そうだ、俺は金髪の男に負けて・・・千登瀬を守れなかったんだ・
・俺に力が無いばかりに。

「一度の敗北・・・その程度で挫かれるほど、汝の心は弱くはあるまい？強き心を持たねば、我と対話する事など、不可能なのだから」

炎青は俺を励ますかの様な言葉を口にした。

まるで、まだ何か希望があるかの様に。

「さあ、選ぶがよい、強き心を持つ者よ！！我が分身となりて新たな王となるか、このまま朽ちて冥府へ帰^きすかを！！」

「俺は・・・」

・・・言おうとして言葉が詰まる。

俺なんかそんな力を手に入れる資格があるのか・・・何もしてこなかった俺が・・・。

炎青はまたも俺の考えを悟ったかの様に言葉を紡いだ・・・それは・・・能力が無く、墮落していた俺を・・・希望を持っていた頃まで立ち直らしてくれる程の力強い言葉だった。

「『やれる事から逃げるな、やりたい事は最後までやり遂げる、無理なら・・・俺が力を貸してやるから』・・・過去にそう言ったのは、誰だ・・・？」

「その言葉は・・・俺が小学校で千登瀬と月詠に言った言葉・・・これまでの俺達をずっと繋いで来た言葉だ・・・」

あの時はまだ未来に希望を抱てた・・・あの時の俺なら力を得る資格があつたかもしれない。

だけど・・・

「けど、今の俺には・・・力を得る資格も無ければ、昔の様な覚悟も・・・」

そう言おうとした時、不意に目の前に巨大な丸い鏡の様なものが見れ、そこに・・・雨の中、血だらけになりながら俺を運ぶ月詠の姿が映し出された。

月詠の事だ、俺がやられた瞬間、即座に俺を連れて逃げ出したはずだ。

月詠の状況判断の速さとの確さは学園の先生にも一目置かれる程高いからだ。

傷だらけなのは多分、金髪の男の追撃に合ったからだろう。

そして何よりも驚いたのは、月詠の身体はボロボロになっているのに対し、俺の身体には金髪の男にやられた傷以外、新しい傷は付いていない事だった。

俺はこの惨状に、言葉を発せ^{はっ}ないでいた。

「この映像は一昨日の出来事だ」

「一昨日だと！？じゃあつ、今はどうなってるんだ！？千登瀬は！？月詠は！？」

一昨日の事と聞いて俺はどうしてもなく焦りを覚えた。

あの金髪の男の目的は知らないが、嫌な予感がしてしょうがないからだ。

「案ずるな、汝の友人は二人とも無事だ。だが、少女に関しては早

急に手を打たねば、どうなるか分かった物ではないだろうな」
「とりあえず、今は無事なんだな!？」

俺はどうすればいいのか、頭の中で整理する。
それを考えてる内に・・・俺の中で何かが吹っ切れた様な気がした。

そして、一つの結論に達した。

「なあ、炎青・・・」

「何だ？」

「俺に力をくれるって言う、お前の目的は何なんだ？」

「吹っ切れたかと思えば、まだ不安か？」

炎青はさつきまでの厳格な雰囲気とは違った優しそうな声で愉快そうに笑い、俺の質問に応えてくれた。

「安心しろ・・・他の幻獣わんげうの理由は知らないが、少なくとも我は私欲の為に力を与えるわけでは無い。我は力を与える過程で明日への道しるべを示しているにすぎないのだ。・・・我は歴代の青竜王達にはそうして接してきたのだからな」
「それを聞いて安心したぜ・・・」

裏が無いなら俺のとる行動は一つだろう。

「炎青、その力を貰うぞ!!」

「承知した。我は新たな青竜王の誕生を心から祝福しよう」

炎青がそう言うと、蒼く輝く玉が俺の前に現れた。

「受け取るがいい・・・その宝玉こそが我が力の塊、その宝玉を手

にした時から、汝は正式に青竜王と力を得る」

炎青に諭され、俺はその宝玉を手を取った。

その瞬間、宝玉は一層輝きを増し、俺の意識を蒼い光によって包み込んだ。

「月詠、お前の頑張りのお陰で目が覚めたぜ！千登瀬、待ってるよ……必ず助け出してやるからな！！」

新たな決意を胸に刻むと、俺は炎青に向き直った。

「炎青、お前の事はよく知らねえが……ありがとうな、俺を立ち直らしてくれて」

「気にする事は無い。我はいつでも汝を見守っているのだからな。・
・我が道を行くがよい、新たなる青竜王よ」

俺からの礼を聞き、最後に俺に激励を残して炎青の姿が消えて行った。

「さあ、何だろうと……やってやるうじやねえか！！」

目覚め(後書き)

誤字、脱字があれば教えてください。
すぐに修正します。

感想等もいただけると、作者のやる気が上がります W W

慌ただししい開戦（前書き）

約一週間ごとに更新して行こうと思います

慌ただしい開戦

眩いばかりの蒼い光が消えた時、俺の目に映った光景は木で作られた天井だった。

ここがどこか分かる、学園の近くの教会の丁度裏手にある月詠の家の客間だ。

月詠が運んでくれた後、手当をされてベッドの上に寝かされたらしい。

その際に血だらけになった制服は着替えさせられたらしく、新しいカッターシャツに着替えさせてもらった。

ちなみに、何故この場所に俺がいるのかここまでハッキリと分かるのも、俺が眠っている間の事を全て炎青が映像として見せてくれたからに他ならない。

その他にも、炎青は俺にもう一度生きるチャンスを・・・挽回のチャンスを与えてくれた。

それに応えるためにも、すぐに行動を始めないと・・・そう思っ
て俺は身体を起き上らせると、胸に違和感を覚えた。

何かが丁度胸の真ん中にある感じた。

カッターのボタンを外し、包帯を引き裂いて確認してみたが何も無い。

気のせいだと思ってカッターのボタンを止め直して立ち上がった瞬間、急にドアが開いて少女見覚えのあるツインテールの少女が部屋に入ってきた。

ツインテールの少女は俺を見るなり・・・

「お兄ちゃーーーーーん!!!!!!!!!!!!!!」

そう言って満面の笑みで抱きついて来ようとしたが、俺はツインテールの少女の抱きつきを、まるで闘牛士のように回避した。

俺に避けられ、ツインテールの少女は俺が今まで眠っていたベッドの上に顔から思いつきりダイブした。

流石に痛かつたらしく、「ふにゃ〜」とか言いながら顔を手で覆っている。

ちなみに、このツインテールの少女は俺の妹で、名前は『夏目水佳』。

高校一年生にしてランク4（一年生の平均ランクは2）のメモリーズで、一年生の女子の中でもトップクラスの実力を持っていて学業も優秀。

俺と同じ色の長い黒髪をツインテールにし、透き通った綺麗な瑠璃色の瞳と他者を圧倒する胸（前に一度姉さんが酔っ払った時に92もあると聞いた事がある）に整った顔立ちと、異性にモデル為の要素全てを持つていたりする、俺には出来過ぎた妹だ。

だが、完璧な人間には何か欠点がある。

水佳も例外なく欠点があり、身長が平均より少し小さい。

それともう一つあるんだが・・・その欠点についてはすぐに分かるだろうから、今は放置で。

そうこう説明してる間に、痛さから回復した水佳が涙目でこっちを見ていた。

「竜兄い、痛いよおー。何で避けるの？」

とか訴えてきた。

「普通、怪我人に抱きつくバカがいるかあ!!」

俺は常識を思いつきり怒鳴った。

だが、肝心の水佳はと言つと・・・

「だって、あれだけ重症だった竜兄い que 起き上ってるんだもん、嬉

水佳も反射的に頭を抱えて俺に謝っている。
本当はもつと言いたいところだが、今はそんな暇は無い。

「こうしちゃいられねえ、シスターメリーの所へ行くぞ、水佳！！」

とにかく、シスターメリーは強い事は知ってるが、俺が撒いた種だ、俺が蹴りをつけに行くのが道理だ。

ちなみに、シスターメリーってのは月詠の保護者で、詳しくは知らないが無茶苦茶強い。

俺や月詠が技術を多少なりとも使えるのは、シスターメリーの扱しごときによるものが大きかったりする。

シスターメリーについては後々詳しく説明するでしょう。

「ふえ？行くつて・・・逃げるんじゃないの？竜兄いは戦えないじゃん」

水佳に至極まっとうな事を言われる。

けど・・・多分大丈夫だ。

ぶつつけ本番になるが、試してみるしかない。

「安心しろ、水佳。勝機はあるさ」

炎青から貰った力がどんなモノかは分からない。

けど、やるしかないんだ。

水佳は俺の突拍子もない言動にキョトンとしていた。

無理は無いか、俺と月詠がランク0なのは有名だし。

「そんな目をするの久しぶりだね・・・竜兄いがそう言っなら良いよ、分かった。けど、無理は駄目だからね」

しばらくキョトントしていた水佳が俺の無茶な提案を飲んでくれた。

さて・・・

「ぶっつけ本番だが、やってやらあ!!」

俺は部屋から飛び出す様にシスターメリーの所へ向かった。

「何か分からないけど、竜兄いカツコイイ!!」

置いてかれそうになった水佳がにこやかに俺の後に続いた。

慌ただし開戦（後書き）

誤字脱字があれば教えてください。

すぐに修正します。

感想も頂けると作者のモチベーションが高まるかもですWWW

フォルムレエゼ(前書き)

いやはや、造語作るのがって難しいですよー・・・
自分のセンスの無さに絶望しますよWWW

フォルムレエゼ

「シスターメリー！！」

俺と水佳はシスターメリーがいる教会の大聖堂に到着した。

身の丈くらいある、十字架を模した大剣を構えているシスターメリーの隣に、まだ包帯を巻いている月詠がスナイパーライフルを持って待機している。

二人がいる正面の入口には、眼帯をしたタンクトップの厳いかつ男を筆頭に、12人のヤクザっぽい男達が各々物騒な物を持って立っていた。

空気は静まり返っており、両陣営ともいつでも応戦可能といった状態だ。

「これは・・・気を抜ける状況じゃないよね・・・」

水佳もシスターメリーの横に並び立った。

俺が寝ていた部屋の時とは雰囲気が180度違っている。

「水佳、私は竜馬を連れて逃げると言っただけだ？」

シスターメリーが水佳に静かにそう問いかけた。

そう言えば、水佳がさつきそう言ってたな。

「そつだぞ、水佳嬢。同志竜馬にメモリーズと正面から戦う力は無いんだぞ」

月詠が続けてそう告げた。

しかし、俺はその言葉に違和感を覚えた。

「月詠、戦えないなんてお前には言われたくねえぞ」

そつだ、月詠は俺と同じランク0。

シスターメリーに扱かれて様々な戦闘技術を体得しているとはいえ、今回の様な真つ正面きつての戦闘は厳しいはずだ。

村々コンビの時の様に不意打ちでの先手必勝なら話しは別だが。

「・・・そろそろ仕事を初めていいかね・・・シスターさんよお」

痺れを切らしたらしい眼帯の男が口を開いた。

表情から察するに、そうとうイラついている様だ。

「あら、お仕事熱心な人なのね。それとも、少女誘拐の目撃者を消す為だけにここまでするってことは・・・普段は相当お暇なのかしら？」

シスターメリーが冷笑と共に男の言葉を聞き捨てた。

どうやらそれが男の逆鱗に触れたらしく、「ぶつ殺せ！！」の眼帯の男の声で、他の男達が一斉に襲い掛かってきた。

「跳んだ奴らは任せてもらおう！！」

男達が動き出したと同時に、月詠がスナイパーライフルを本格的に構え、瞬時に狙いをつけ・・・

「見せてやろう、この俺の新たな能力を！！」
ちから

言い放つと同時に引き金を引き、スナイパーライフルから一筋の翡翠色の光が放たれた。

それはまるで・・・ビームの流星の様だ。

ビームの流星は、跳びかかってくる男の一人を撃ち抜いた。

「月詠、お前・・・いつ能力を使えるようになったんだ？」

次に狙いを定めている月詠に俺は疑問を投げかけた。

こんな状況だ、今聞くべくでは無いと分かってはいるが・・・どうしても気になってしまう。

「お前が眠っている間に俺にも色々あつてなあ・・・」

月詠がこの世の地獄を思い出すかの様に嫌な顔をした。

「それはね、竜馬、あんたが寝ている間に月詠に一度地獄を見せただけさ」

月詠がそんな顔をすると同時に、シスターメリーがニッコリと説明してくれた。

うん、今ので理由は大体予想は着いたぞ、月詠。

「で・・・さつきまで瀕死の重傷だったはずのあんたはどうやってあれだけの傷をこの短期間で治したのが私は一番気になるんだけど？」

シスターメリーが至極まっとうな事を言ってくる。

多分、ほかの2人も少なからずそう思っているだろう。

「それは後で詳しく聞くとして・・・何か勝算があつてここに来たんだろうね？」

俺が返答に困っていると、シスターメリーは現状を打破するのが

優先と考えたらしく、男達に向き直った。

本の僅かとはいえ、今の状況で会話するのは危険すぎる。

「勿論だ!!」

俺はこれ以上戦闘に支障をきたさないように短く肯定した。

それを聞いた月詠は、続いて2人目、3人目、と正確に撃ち落とすしていく。

3人目を打ち落とす時点で、残りの男達は跳びつくのを止め、少し怯んだ。

「ツツキー、ナイス狙撃!!」

「後は任せなさい!!」

勢いが殺がれた残りの男達に水佳が突撃した。

大剣を持って突撃してくるシスターメリーよりも、丸腰の水佳の方が簡単に潰せそうと男達は思った様で、残りの9人の内3人が水佳の方へ襲い掛かり、6人はシスターメリーに襲い掛かる。

シスターメリーに対して3人の男達が炎を纏わせた鉄パイプを振り下ろした。

しかし、シスターメリーは人数差を気にする様子も無くそれを右手に持った大剣で受け止め、バラバラに襲い掛かって来た残りの3人を左手だけで薙払う。

シスターメリーに薙払われ、バランスを崩した相手に月詠が容赦無くビームの弾丸を叩きこむ。

水佳は3人の男の内、1人が跳びかかってくると同時に自分も跳び上がり、その男を容赦なく水を纏った右の拳で殴り飛ばし、教会の壁をぶち抜いて外に吹き飛ばした。

ちなみに、水佳の能力は『水鎧』^{アクアアーマー}といい、水を纏う事が出来る能力だ。

能力によつて威力が増強されているのもあるが、水佳は能力に目覚めた時から同時に凄まじい筋力も手に入れている。

筋力の増加は、メモリーズに起こる身体能力強化によつて、能力に目覚めた者は全員起こるが、それが色濃く出る者は・・・例外無く強い。

水佳は能力こそ珍しくは無いものの、身体能力が高い為にかなり強い。

その結果が今の一撃だ。

そのあまりの威力に、初めて見る男2人は驚愕している。

「よお兄ちゃん・・・暇なら遊んでくれや!!」

水佳達の戦闘を見てみると、いつの間にか眼帯の男が俺の隣に来ていた。

眼帯の男の両手は鋼鉄のに変化しており、指が鋭い刃になっている。

男は言うが早い、俺に向かつてその手を振り下ろして来た。

見るのに気を取られていたせいで俺は回避が遅れ、自分の愚かさ

に後悔した瞬間、俺の胸から溢れんばかりの蒼い光が放たれた。

そして、その光が放たれたと同時に、俺の脳裏に一つの言葉が過よつた・・・その言葉は・・・

『フォルムレエゼ』。

どこで聞いたのかは分からない。

けど・・・今はどうしてかこの言葉がとても重要だと思えた。

「一か八かだが、やってやるぜ!!・・・フォルムレエゼエエエエエエエ!!!」

俺はこの言葉を力いっぱい叫んだ。

すると、俺は蒼い光に包まれ、蒼い光の球体となつての上に向か

って飛び上がって姿を消した。

眼帯の男の攻撃は、ギリギリ回避できたらしい。

俺は姿を消した空中に、ガラスを割って表れるかのように再び蒼い球体の光に包まれて現れた。

その光の中で、俺の服装は水色を基調としたタキシードと燕尾服を足した様なものに一新されると同時に、俺の中に凄まじい力が流れ込んでくるのが分かった。

髪の色も、黒から蒼に変わり、胸には蒼く輝く、炎青から受け取った宝玉がある。

光が納まると、そのまま俺はゆっくりと地上に降り立った。

まさかの光景に、さっきまで戦闘をしていた全員が手を止め、言葉を失っている。

「まさか……こっぴてメモリーズ神力記憶者……!？」

シスターメリーが驚きを隠せない声で言った。

今のシスターメリーの言葉で、この力こそが炎青がくれた力なのだ……これなら勝てる、そう俺は確信した。

「貴様は……一体……何者なんだあ!？」

眼帯の男が驚愕の顔で俺の正体を聞いてきた。

俺は軽く笑みを浮かべると……炎青が言っていた事をそっくりそのまま言い放つ事にした。

「俺の名は夏目 竜馬……せいりゅうおう青竜王だ!!」

フォームレエゼ（後書き）

誤字脱字があれば教えてください、すぐに修正します。
感想も頂けると、作者のやる気が上がりますww

圧倒的な新星（前書き）

いやはや・・・体調管理って大変ですよね・・・
お陰で更新がすっかりおそくなってしまうました・・・

圧倒的な新星

残りの男達（水佳達にやられて後3人しかいない）が、すぐさま俺を警戒、包囲した。

眼帯の男は、俺から少し距離をとり、男達を使って様子を見る様だ。

残り3人の男達は火に水、電気とそれぞれ能力を鉄パイプに纏わせて、俺に向かって突っ込んでくる。

しかし、3人の攻撃は俺の身体に傷一つ付ける事は出来ず、金属がぶつかり合う様な音と共に鉄パイプがへし折れた。

その異様な光景に、男達だけではなくシスターメリー達も驚愕の表情を隠せないでいる。

何故なら男達の鉄パイプをへし折ったのは俺の肌が強靱だった訳でも、体がダイヤモンドの様に变化したわけでもなく、俺の体に浮き上がった蒼く光り輝く竜の鱗だったからだ。

その鱗は鉄パイプが当たる瞬間、攻撃が当たる場所に瞬時に俺の浮き上がり、俺の身体を守り、攻撃が当たった数秒後に鱗はスツと消えて普通の人間の皮膚に戻った。

鱗が消えたのを確認したのかどうかは知らないが、1人の男が折れた鉄パイプを投げ捨て、火を纏った拳で殴りかかって来たが、俺の右頬に拳が当たった瞬間に火は消え、嫌な音とともに拳が潰れ、男は発狂したと同時に気絶してしまった。

どうやら鱗の出現は意識する必要は無く、無意識の中で攻撃に反応して現れる様だ。

この鱗の凄まじい強度に残りの2人の男は驚愕していたが、覚悟を決めた様にそれぞれの能力を纏って突っ込んできた。

放っておけば勝手にやられてくれるだろうが、態々殴られ続ける理由は俺には無い。

俺も反撃をする為に地面を軽く蹴った……つもりだった。

軽くだったはずなんだが・・・一瞬で1人の男の前に正面激突、そのまま男は壁をぶち破って外に吹き飛んだ。

「・・・っえ・・・!？」

自分の異常なまでに向上した身体能力に驚いて動きが止まっていた俺に、もう1人の男が空中から水を纏った拳で殴りかかって来た。俺は反射的に膝を突きだしながら思いつきり跳び上がった・・・までは計算通りだった。

しかしまたも想像以上の力が出てしまい、男が拳を振り上げた瞬間に男に俺の膝蹴りが直撃し、バキボキという骨が碎ける鈍い音とともに男は天井に叩きつけられ、天井にめり込んだ。

今の男が撃沈した事やシスターメリー達の活躍により、残る敵は眼帯の男1人となった。

「勝負は着いた、降伏なさいな」

シスターメリーが眼帯の男に降伏を勧める。

「・・・降伏だあ・・・？」

しかし、降伏を勧めるシスターメリーに対して眼帯の男は能力を解かず、不気味に笑いながら自分の眼帯を取った。

「俺の眼帯は能力を押さえこむリミッターになっててなあ・・・外しちまうとまずいんだが・・・今の兄ちゃん達に対抗するにゃあ仕方ねえ・・・」

眼帯が取れると同時に、男の全身の筋肉が隆起し始めた。

筋肉の隆起が納まった時には、男の身体は圧倒間に三倍近くま

で巨大化しており、さっきまで両腕だけだった鋼鉄が全身に広がって、邪悪な鉄の巨人の様に変貌していた。

「サア！！サイカイトイコウカア！！」

言葉を発したと同時に、男は真っ直ぐにシスターメリーに突進していく。

シスターメリーは大剣でそれを受け止めるが、体格差がありすぎて簡単に吹き飛ばされ、壁に叩きつけられてしまった。

シスターメリーは受け身を取っていたようで、意識は何とか失っていないようだ。

男は次に水佳に向かって突進し始めた。

水佳は纏っている水を正面で集めて壁を作ったが、軽々と男に突破されて空中に跳ねあげられた。

「マズハヒトリイ！！」

男はゲスな笑みを浮かべ、空中で逃げ場の無い水佳に致命傷を与えようと拳を振り上げた。

月詠が止めようとビームを連続で浴びせるが、男の鋼鉄の身体が全て弾き飛ばして無効化している。

シスターメリーも防ごうと必死で動こうとしているが、さっきのダメージが大きい様で、立ち上がるのがやっとのようだ。

それを確認してか、男は勝利したかの様に動きが大ぶりになった。
・
・
・
今だ！！

「俺を忘れてんじゃねええ！！」

俺は男に向かって全力で右ストレートを叩きこんだ。

今回はさっきの男達を相手にして少しは感覚が分かってたから上

手くいった。

男は勢いよく吹き飛び、壁にぶつかって止まった。

「シニテエラシイナ、アンチャン!!」

「上等だ、固いだけの木偶の坊!!」

吹き飛ばされて怒った男はすぐさま立ち上がって俺に殴りかかって来た。

男の動きにに合わせて俺も右で渾身のストレートで対応する。

俺と男の拳が激突、同時に地面に大きく亀裂が走り、凄まじい衝撃が空気を振動させた。

正面からの力での勝負では俺が勝った様で、男の腕に大きくヒビが入る。

このまま一気に勝負を決めるべく左腕に力を込めた瞬間、男が無事な方の腕で俺の体を掴んで握り潰そうと力を込める。

「ザンネンダッタナ、ココデオワリダ!!」

男が勝利を確信した様に嗜虐的な笑みを浮かべ、握る力を更に強くしてきた。

流石にマズイ、何とか脱出しねえと・・・そう思った瞬間、胸の宝玉からエネルギーらしき光が集まってきた。

何でだろうか・・・俺はこの光が集まる現象を知っている気がする・・・。

そして・・・この光ならこの戦いを終わらせられる事を!!

「終わるのは・・・お前の方だ、鉄くず!!」

そう言い放った瞬間、胸の宝玉から凄まじいエネルギーが一筋の帯となって放たれた。

一瞬にして男はエネルギーの奔流に巻き込まれ、壁をぶち抜いて
夜空の彼方へと消えて行った。

圧倒的な新星（後書き）

誤字脱字があったら教えてください、すぐに修正します。
後、感想もいただけると作者のモチベーションが上がります。

開戦前夜（前書き）

更新遅いし、短いしでごめんなさい

これからの展開にかなり迷っていました^^;

次話からはガッツリと更新させてもらいます

開戦前夜

胸から放った蒼い光の本流によって男をお星さまにした直後、エ
ネルギーがくれたかの様に元の姿に戻ってしまった。

さつきまで宝玉があつた胸の部分を見ると、蒼い線で『天』
という字の様に見える模様が刻まれている。

「それは守護印だね。それもとびつきり上等なやつだ」

「守護印・・・って、お守りとかによく書いてあるやつですか？」

「うむ。だが人に刻まれているなど、聞いたことがないぞ」

シスターメリーと水佳、月詠がいつの間にもやらの周りに集まっ
て俺と同じように俺の胸の模様を眺めていた。

「この状況、つまり同志竜馬はお守りにでもなったということか？」

「ええっ！？ 竜兄いってお守りだったの!？」

「んな訳あるかあ！！ もうちょい真面目に考えられんのか、お前ら
は！！ それに、水佳は何で俺を最初からお守りにしてんだ!？」

「ごめんなさああああい!!！」

俺の突っ込みに水佳は頭を抱え、涙を浮かべながら謝ったが、月
詠はニヤニヤと笑っている・・・こいつ、懲りてねえな。

「おふざけはそこまでにしな、二人とも。竜馬もつまらない冗談を
本気にしてどうするの」

「・・・すみません」「」

シスターメリーに一括され、月詠と水佳もまじめに話ができる雰
囲気になった。

「まず、状況の整理から始めましょうか。色々あるけど、最初は何故ここに瀕死の重傷だった竜馬が回復して戦っていたか、それを本人から説明してもらいましょうか」

「オツケー・・・って、それってほぼ全部じゃ「つべこべ言わずにさっさと説明なさい」・・・はい」

反論する間もなく大剣を喉元に突きつけられ、俺はここまでに至る経緯を話した。

炎青の事も話したが、予想通り三人とも半信半疑だ。

「まあいいわ、これで役者は揃った訳だし」、とシスターメリーは不適に笑みを浮かべながら呟いた。

「揃った？一体何が？」

俺はその呟きの意味が分からずに聞き返した。

そして、シスターメリーは呆れたように一つ溜息を吐いてから「決まってるじゃない、囚われの姫君を助け出しに行く為の戦力よ」と言った。

「えっ・・・！？協力してくれんのか!？」

「何驚いてるのよ、あんたは。それとも、あんたは助けに行く気が無かったの？」

「いや、そのつもりだったけど」

「ならOK、問題無しね。じゃあ作戦開始は今から10時間後の明日の早朝5時、敵のアジトの場所については手を打ってあるから心配はなし。そーゆうことで、私に竜馬と月詠にはそれまでに力のコントロールを叩きこんであげるから、覚悟しときなさい。」

そう言い残すと、シスターメリーはさっさと行ってしまった。
水佳も付いて行ってしまった為、残された俺と月詠は顔を見合
せ、共に溜息を吐いてこれからの戦いに備えるのだった。

開戦前夜（後書き）

誤字脱字があったら教えてください、すぐに修正します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6667q/>

魔術と科学の交差点

2011年5月6日17時38分発行